

方剂名	効能	生薬組成	
		主治および証	病機 方意
書籍			
和解剤 和解少陽剤 1			
しょうきいこうとう 小柴胡湯	和解少陽（通調少陽枢機・達邪外解）	柴胡 15g・黄芩 9g・人参 6g・半夏 9g・炙甘草 6g・生姜 9g・大棗 4g 水煎し服用する。	
傷寒論	<p><主治></p> <p>少陽半表半裏証は、主として肝臓、胆嚢、腎盂、咽喉、肺、耳など、体の上部の炎症の際にみられる。風寒散漫少陽</p> <p>往来寒熱、胸脇部が脹って苦しい、食欲不振、胸苦しい、悪心、口が苦い、咽の乾燥感、目がくらむ、舌苔が薄白、脈が弦などを呈す。</p> <p>熱入血室</p> <p>往来寒熱、胸脇部が脹って痛む、下腹部が硬くなり痛む、夜になると言語錯乱や意識異常が生じる、月経が途中で停止したり月経期でないのに来潮する、身体が重い、頭汗、舌苔が薄白、脈が弦などを呈す。</p> <p><病機></p> <p>風寒表邪が少陽（三焦、胆）の半表半裏に侵入し、邪正相争により少陽気機を阻滞して陽気と水津の布散と転輸を傷害し、少陽枢機不利を来たした状態であり、いわゆる「柴胡証」である。</p> <p>三焦の半表半裏で邪正が相争して気機を阻滞しているために、正気が表に外達して邪を駆出するのが妨げられると共に、衛陽が鬱阻されて肌表を温煦できない、即ち病邪が正気よりも強いと悪寒が生じ、邪正相争で発生する陽熱が鬱して壅盛になり、体表にまで外犯する、即ち正気が病邪に打ち勝つと熱感が発生し、正気が邪気との相争で消耗するにつれて熱感は消退する。正気が再度充足するまでは、同様の経過が起こるために、まず悪寒が生じ次いで熱感があらわれるという「往来寒熱」がみられ、悪寒と熱感の順序が変わらず境界も明らかでないことが特徴である。なお、邪正相争が継続しているので体温は引き続いて正常より高く、熱感が生じたときには体温はより増高する。少陽の経脈は胸脇部を循り、経気が阻滞されるために胸脇部が脹って痛み（胸脇苦満）、阻滞が強くなると脇下が硬く張る（脇下痞硬）、気機阻滞により胆気が鬱して化火すると、胃に横逆して胃気を上逆させ食欲不振、悪心、腹痛を引き起こしたり、胆火上炎により口が苦い、咽が渇く、目がくらむなどが現われる。三焦水道が阻滞されるので水湿が停積し、心を上擾すると動悸が、肺を上犯すると咳が生じ、水津の膀胱への下輸が阻滞されると小便不利（尿量減少）がみられる。舌苔が薄白は化熱が明らかでないことを、脈が弦は少陽経気が鬱していることを示す。</p> <p>外邪が半表半裏に侵入して化熱し、三焦を通じ血室に侵入したものが、「熱入血室」である。血室は子宮に相当し、内は衝脈に通じ外は陰道（膣）に通じ月経を主っている。外邪が血室に侵入し、熱邪が迫血妄行すると月経期ではないのに月経が来潮したり、熱邪が血と結すると月経期間中であるのに中断する。なお、熱病の経過において月経が開始したり終了する場合にも、血室の機能の変化に乗じて熱邪が侵入し熱入血室を生じることがある。邪が三焦の半表半裏にも散漫しているために往来寒熱、胸脇苦満、脈が弦などがみられ、熱邪が衝脈血分にまで侵入して結すると下腹部が硬くなって痛み、血分の熱邪が神明を上擾すると夜間に言語錯乱や意識の異常がみられる。少陽枢機が阻滞されるので身体が重く、熱邪が津液を上蒸すると頭汗がみられる。なお、熱邪がすべて裏で結した場合には、一時的に解熱して脈が遅くなることもあるが、治癒したわけではない。</p> <p>発熱性疾患以外で適応する病態は、精神的なストレスに伴う自律神経系の失調（肝気鬱結）が基礎にあり、この状態がつづいて自律神経系の興奮による熱証が生じ（肝鬱化火）、ゆううつ感、いらいら、怒りっぽい、胸脇部が脹って苦しい、寝つきが悪いなどがみられ、また消化吸収機能の低下や全身の機能低下（脾気虚）が生じ、元気がない、食欲がない、疲れやすいなどと共に、水分の吸収、排泄障害（痰湿）が生じ、とくに胃内留飲による悪心、嘔吐、および咳嗽、多痰などが見られ、舌苔が白膩であることが重要である。</p> <p><方意></p> <p>本方（小柴胡湯）は、少陽半表半裏証に対する主方であり、少陽枢機を通調して達邪外解する。</p> <p>主薬は少陽の専薬である柴胡で、軽清昇散により少陽の気機を通達し疏邪外透する。苦寒の黄芩は、少陽の鬱熱および鬱変した胆火を清する。柴胡で散じ黄芩で清することにより祛邪する。半夏・生姜は辛温で和胃降逆、散結消痞し、黄芩と共に辛開苦降に働く。益気の人参は扶正によって散邪を助け、大棗・炙甘草・生姜は中焦を振奮し衛気を宣発し、邪が裏へ侵入するのを防止する。全体で祛邪を主とし正気にも配慮して胃気を和しており、汗、吐、下によらず邪を除くので「和解」と称する。</p> <p><参考></p> <p>邪が少陽三焦、胆にあり、胆は相火の腑で化火しやすく、三焦は陽気と津液の通路で全身に分布し広汎であるために、邪によって気機が鬱阻されると全身に多様な病変が現れる。それ故に少陽枢機不利に伴った症状がみられれば本方を用いてもよい。基本的には、往来寒熱、胸脇苦満、舌苔が薄白、脈が弦などを備えるべきである。</p> <p>加減法</p> <p>胸中に熱が聚り胸中煩が生じ、胃気上逆の嘔吐がない場合には、助火の恐のある人参と、降逆の半夏は不要であるので除き、甘寒で開結散熱、除煩に働く栝楼仁を加える。</p> <p>傷津による口渇があるときは、辛燥の半夏を除き、益気生津の人参を増量し、生津清熱の天花粉（栝楼根）を加える。</p> <p>胆病および肝で肝気乗脾の腹痛が生じたときは、苦寒で傷脾する恐のある黄芩を除き、平肝止痛の白芍を加える。</p> <p>水気の結滞を兼挟するか、結気の鬱滞が甚だしいために脇下痞硬があるときは、甘温で気機を壅滞させる大棗を除き、軟堅散結の牡蠣を加える。</p> <p>少陽枢機不利で、水津の布達と転輸が障害されて飲邪が生じ、心下に停積して動悸と小便不利をきたしたときは、苦寒で傷脾し、水湿停滞を増悪させる恐れのある黄芩を除き、利水滲湿の茯苓を加える。</p> <p>表証（微熱、口渇はない）が残っているときは、祛邪の妨げる人参を除き、桂枝を加えて解肌発表する。飲邪が肺を犯して咳嗽が生じているときは、壅滞を強める恐れのある人参・大棗を除き、生姜を乾姜に代えて、斂肺止咳の五味子と、温陽散飲の乾姜の配合で、温肺止咳、散飲する。</p>	<p>日本での保険適応効能、効果</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、体力中程度で上腹部が脹って苦しく、舌苔を生じ、口中不快、食欲不振、時により微熱、悪心などのあるものの次の諸症；諸種の急性熱性病、肺炎、気管支炎、感冒、胸膜炎、肺結核などの結核性諸疾患の補助療法、リンパ腺炎、慢性胃腸障害、産後回復不全 2、慢性肝炎における肝機能障害の改善 	

小柴胡湯合芍薬甘草湯 小柴胡湯合黄連解毒湯	胃腸、胆道などの平滑筋けいれんによる腹痛には、芍薬甘草湯を合方する。 不安、緊張感があり、いらいら、怒りっぽいなどの熱証が強いときは、黄連解毒湯を合方する。 また、この合方剤は胃炎、食道炎などで充血、びらんによる症状が強いときにも用いる。およびストレス性の胃・十二指腸潰瘍にも適する。また、急性肝炎、頭部の湿疹、頑癬にも用いる。
小柴胡湯合黄連解毒湯合小陷胸湯 (柴陷湯合黄連解毒湯) 小柴胡湯合黄連解毒湯合茵陳蒿湯	胃炎、食道炎で充血、びらんによる炎症が強く、胸痛があるときには、小陷胸湯を合方する。 急性肝炎で、黄疸を伴うときには、茵陳蒿湯を合方する。
小柴胡湯加桔梗石膏 小柴胡湯加桔梗石膏合芍薬甘草湯	小柴胡湯証で、咽痛、口渇、やや高熱など熱証が強いときに用いる。 急性・慢性の扁桃炎、扁桃周囲炎、気管支炎、肺炎、中耳炎、副鼻腔炎あるいは癰・癤などの化膿性炎症で、胃が弱く食欲がなくなり、口が苦いなどの症状があるときに応用する。 小柴胡湯加桔梗石膏の日本での保険適応効能、効果 咽喉が腫れて痛む次の諸症；扁桃炎、扁桃周囲炎 胆のう炎、胆石症など胆の炎症疾患で、炎症が強いときに、桔梗石膏を加味し、腹痛を伴うときには、芍薬甘草湯と合方する。 また腹痛、便秘を伴うときは、白芍・大黄が配合された大柴胡湯を基礎として大柴胡湯加桔梗石膏・大柴胡湯合芍薬甘草湯として用いる。
小柴胡湯合大黄牡丹皮湯合桃核承気湯	卵巣、卵管、子宮などの炎症で、発熱と下腹部痛があり、悪心を伴うときに用いる。
小柴胡湯合葛根湯 小柴胡湯合葛根湯加蒼朮 小柴胡湯合葛根湯加桔梗石膏	太陽少陽合病、すなわち葛根湯証（発熱、悪寒、無汗、項背部の凝りなど）で、悪心、口が苦い、唾液が粘るなどの胃症状を伴うときに用いる。また半表半裏証があり、無汗、項背部の凝りがあるときにも用いる。さらに関節痛が強いものは水分が多いため、舌苔も厚膩のことが多いが、このような場合には更に蒼朮を加える。 風熱で、扁桃炎、中耳炎などで化膿傾向があるときに用いる。 急・慢性の扁桃炎、扁桃周囲炎、中耳炎、副鼻腔炎などの化膿性炎症で、胃が弱く、食欲がなくなり、口が苦いなどの症状があるときに用いる。
小柴胡湯合白虎湯 小柴胡湯合白虎加人参湯	熱入血室があり、炎症が強く、口渇がひどく、高熱があるときに用いる。 熱入血室があり、高熱が持続し発汗が多く、高熱のために津液が消耗し、口渇がはげしく、水分をいくら飲んでも飲みたがり、飲んでもすぐに口が乾き、尿量は少ない、口は乾燥し、舌苔も黄色を呈するときに用いる。
小柴胡湯合猪苓湯または 小柴胡湯合芍薬膠艾湯	発熱があつて膀胱炎などを併発しているときに、発汗法を行うと、尿が濃縮して高浸透圧となり、症状が増悪して血尿が現われたりするので、和解の小柴胡湯と合方する。血尿があるときは芍薬膠艾湯と合方する。
小柴胡湯合桂枝茯苓丸	卵巣、卵管、子宮などの炎症で、発熱と瘀血による下腹部痛があり、悪心を伴うときに用いる。 慢性の胆のう炎、胆石症など胆の炎症性疾患は必ず瘀血を伴うので、このような状況のときに用いる。 婦人の心身症、自律神経失調症で、瘀血を伴うものに用いる。
小柴胡湯合知柏地黄丸	腎盂炎で、高熱があるときに発汗法を行うと症状が増悪するので、和解の小柴胡湯との合方対処するのがよい。
小柴胡湯合四物湯	さいこしもつとう 柴胡四物湯
小柴胡湯合当帰芍薬散	産褥熱などの深部臓器の化膿性炎症による弛緩熱を伴うものに、この方剤を基本に用いる。 小柴胡湯中の、柴胡・黄芩・半夏・生姜は、燥性が強く長期に用いると津液を消耗して陰虚を引き起こす可能性があり、故に血虚、陰虚があるときや長期に用いるときは、小柴胡湯合四物湯として用いる。 また、婦人の心身症、自律神経失調症で、内分泌異常を伴うものにも用いる。 同様の状況で、冷え性、貧血、浮腫などを伴うときは、小柴胡湯合当帰芍薬散として用いる。
小柴胡湯合桂枝加芍薬湯	小柴胡湯 1/2 量 + 桂枝加芍薬湯 1/2 量 柴胡桂枝湯証で、腹痛が甚だしいものによい。 また、この合方剤は、胃腸、胆道などの冷えを伴う平滑筋けいれんによる腹痛にも用いる。 (冷えが強ければ小柴胡湯合大建中湯として用い、冷えがなければ小柴胡湯合芍薬甘草湯として用いる)。
小柴胡湯合小青龍湯 小柴胡湯合小青龍湯合麻杏甘石湯	肺に冷えがあり、うすく水様の痰が多くでるときに用いる。 気管支炎で、食欲不振、悪心、嘔吐、胸脇部の張った苦悶感があるときに用いる。
小柴胡湯合麻杏甘石湯	気管支炎、肺炎などに用いる。
さいこかぼうしょうとう 柴胡加芒硝湯	小柴胡湯 1/3 量 + 芒硝 6g 水煎し服用する。
傷寒論	風寒が遷延して少陽半表半裏に入り「柴胡証」を呈すると共に、日晡潮熱を發する陽明熱盛を兼挟している。 先表後裏の原則に基づき、まず半表半裏を小柴胡湯で和解した後、少量の小柴胡湯と大量の芒硝で陽明腑熱を清する。